14章

「稲むらの火」のモデル 濱口梧陵

人間愛と機転に満ちたハードとソフトの適応策

大辻永 | Otsuji Hisashi

1 はじめに

本章では、過去に起きたある津波災害とその復興を例に、将来の津波襲来に備えた適応策について、そのハードとソフトの両面から迫ってみたい。ここでハードとは津波堤防であるが、ソフトな適応策とは何か。それは、人々の間に記憶され、継承されるものである。教訓、物語、紙芝居、教科書、祭。さまざまな形態をとって、人の心に構築される適応策である。また、取り上げる例の中では、適応策を実行した人物の隠された人間愛について迫ってみたい。

2 「稲むらの火」の物語

ゆったりとした地震があった。ある村の荘屋の老人は、高台の自分の家から海が引くのを見て、「津波が来る」と直感する。村では秋祭の準備で、地震には気づかないようであった。老人は、機転を利かせて自分の田圃の「稲むら」に火を放ち、村人を高台に招いた。しばらくすると津波が押し寄せ、高台に集まった一同はその難を免れた。

これが「稲むらの火」として有名な物語のあらすじである。『小学国語読本（5年）』（写真14-1）に1937年から1947年まで掲載され、この物語を記憶する人も不思議なほど多い。

写真 14-1 『小學國語讀本』

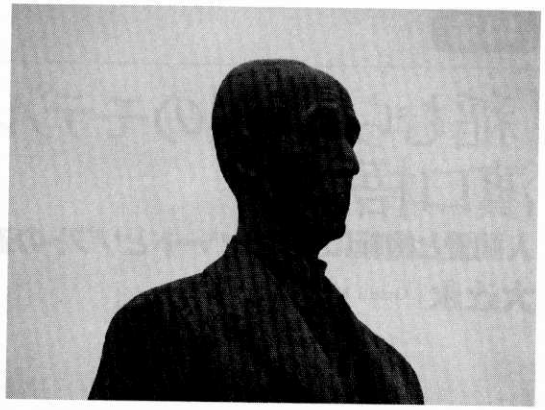

写真 14-2 濱口梧陵

3 物語の成立

この物語が小学校の教科書に掲載されるには、いくつもの条件が重なっている。第一に、モデルになった地震があった。安政南海地震（M8.4, 1854. 11 .5 旧暦）である。そして、実際に松明（たいまつ）で稲むらに火を放ち、村人の命を救った人物がいた。紀州広村（現在の和歌山県広川町）の商人、濱口梧陵（はまぐちごりょう）（1820－1885）という人物である（写真 14-2）。しかし、「稲むらの火」を記憶する方々も、これが実話に基づいていたことを知る人はほとんどいない。第二に、梧陵が地元の人から「生き神様」として崇められていたのを知った小泉八雲（1850－1904）が、明治三陸地震（M8.5, 1896. 6. 15）の惨状を耳にし、梧陵をモデルに“A Living God”（英文, 1897）という作品を書いたということがあげられる。「稲むらの火」で描かれた「ゆったりとした地震」は明治三陸地震の揺れ方であり、梧陵が実際に経験した、激震の安政南海地震ではなかった。その後、小泉八雲の小説を基に世界各地で教材や物語が作られる。東南アジアやインドでも「ハマグチ」の名が知られている。第三に、中井常蔵（なかいつねぞう）（1907－1994　広村に隣接する湯浅の出身）という青年教師が、小泉八雲の作品を基に文部省の公募に応募し採択され、国語教材として「稲むらの火」は実現した。

4 「稲むらの火」復活

「稲むらの火」は 1970 年代に完全に教科書から消え、地元を除いて忘れ去られつつあった。それが、日本海中部地震（M7.7, 1983. 5. 26）の津波により小学生の集団が犠牲になった折、この教材が教科書に残っていれば防げたのではないか、という指摘がなされた（伊藤, 2005）。また、兵庫県南部地震（M7.3, 1995. 1. 17）やスマトラ島沖地震（M9.0, 2004. 12. 26）、その直後に開催された国連防災会議（2005. 1. 18 神戸）で当時の小泉純一郎首相が触れたことなどから、「稲むらの火」が見直されるようになった。

5 ソフトな適応策としての教科書

「稲むらの火」で荘屋の老人五兵衛として描かれた濱口梧陵は、当時 34 歳であった。梧陵は、実際は半身を津波に浸かりながら逃げ延び、道ばたの稲むら十余りに使用人に火を付けさせた。暗がりの中を漂流している者に、安全な場所を示そうとしたのである。高台は広八幡という神社にあたるが、ここの海抜は 10 メートル程度しかない。このように、教科書と実話とは異なる点がままある。しかしここでは、文部省の教材に採択され、多くの人の心に残った事実を重視したい。

この物語の何が魅力なのか。地元広川町で「梧陵さん」の語り部として知られる、清水勲氏は以下の点をあげる。

第一に出だしが巧みである。古い昔話であれば、「むかしむかし」で始まるところ、「これは、ただ事でない」として読者を引きつける（原文は http://www.inamuranohi.jp/ などを参照）。清水氏が中井氏に生前この点を正したとき、中井氏も喜んで「この当時、このような出だしのものはなかった」と、にこやかに語られたそうである。第二に、海を見たことさえない子どもが多かった時代に、海が引くという光景が描かれる。子どもの想像力を目一杯働かせる授業がなされたのであろう。第三に、食料が豊富でなかった時代、

貴重な自分の稲に火をつけるという行為が、幼心に衝撃的であったという。第四に、戦争色が強くなってきた時代にあって、その深い人間愛が子ども達の心に響いたとも指摘される。しかし逆に、称えられるべき自己犠牲に焦点が当てられ、軍国主義時代の教育に馴染むものでもあった。

ところで、「村八分」という言葉がある。一説によると、火事と葬式の二分を残して関係を絶つ、我が国の古典的な風習という。火事を起こせば人が集まるということは、現代よりもずっと見込みのある手立てであったことは確かで、この物語を成り立たせる重要な前提である。

このように「稲むらの火」は、その時代や社会、文化にあった作品であった。長い時間が経っているのに、なぜ多くの人々の間に記憶され、継承されているのかと問うことは、自然災害の教訓を後世に残す手がかりを得る手立てとなる。そして、「自然災害の教訓を残す」こと自体、人の心に構築されるソフトな防災対策、適応策として重要なのである。

6　濱口梧陵のハードな適応策

「稲むらの火」は地震とそれによる津波の話であるが、モデルである梧陵はその後の村の復興に特筆すべき点がある。

濱口梧陵は今でも続く醤油屋（ヤマサ醤油）の七代目当主で、地元広村の名士であった。江戸と銚子に店と工場を構え、和歌山との間を往復していた。当時、銚子は海運の要所であり、関東では江戸に次いで栄えていたという。梧陵は銚子で三宅艮斎（ごんさい）や関寛斎といった蘭学医たちと親交を持ち、生涯にわたって彼らを支援していた（この重要性は後述する）。

「陽明学を小さい頃に学んでいたからです」と清水氏は語る。「仁の心。人のためにという心が大事で、世のためにならなければ学んだ意味がない」と梧陵は考えていたという。その仁の心の結晶が、私財を投じての広村堤防の建設につながった。

梧陵は、津波の後、広村全体を将来の津波災害から守る堤防建設を紀州和歌山藩に願い出た。しかし、多くの村が罹災した中で、財政難にある藩が一村のために多額な資金を出すこともない。梧陵は、資金は自らが供出すると

し、番頭と衝突しても堤防建設計画を実行に移した。

彼が計画した堤防は全長900メートル、高さ4.5メートル、上底7.2メートル、根幅20メートルで、資金は1500両を見込んだ。「生き神様」として郷土の人々が彼を崇めていた第二の理由は、正にこの堤防にあった。NHK「その時歴史は動いた」でも取り上げられ、再放送が重なるほどの反響を呈した（2005.1.12、10.26、11.3,4）。

着工は罹災直後の1855年2月、一応の完成を見たのは1858年12月で、工期はほぼ4年にのぼる。結局、梧陵は2000両を越える資金を提供し、長さ670メートルの当時世界最大級の津波堤防が完成した。

広村堤防にはさまざまな工夫がある。第一に、堤防の村側に櫨（はぜ）を数百株、海側には松数千本を植えた。櫨からは木蝋（もくろう）が採れ、現金収入を見込んだ。松は根が張り堤防を丈夫にし、波の威力を少なくする。もちろん、こういった智恵は、もっと古くから川の洪水対策（川除（かわよけ））などで応用されてきたものである。

第二に、堤防は漁師の田圃の上に建てられた。清水氏の話によると、ここで採れた米を加子米（かこまい）と呼ぶ。漁師は漁で儲けていたが、その田圃に藩から高税率をかけられていた。このような田は、つぶしてしまう方が後々負担にならない。

第三に、老若男女、誰でも堤防造りに参加できるよう、その賃金は日当で支払われた。当時は盆と正月に賃金が支払われるのが普通であったという。このことも手伝って、日に400から500人、のべ5万6736人の手で広村堤防は完成した。広村は当時300から400戸であったことを考えると、村人が総出で構築したと言っても間違いではない。

梧陵は堤防建設以外にも、農具を提供したり、罹災した家族らに仮小屋を50軒建てたり、橋を架けたりして村の復興にあたっている。

7　祭りというソフトな適応策

広村堤防の地元、和歌山県広川町では、「津浪祭」が毎年11月3日に催されている。村を守る広村堤防を造った濱口梧陵と、後世の人々の安全を祈っ

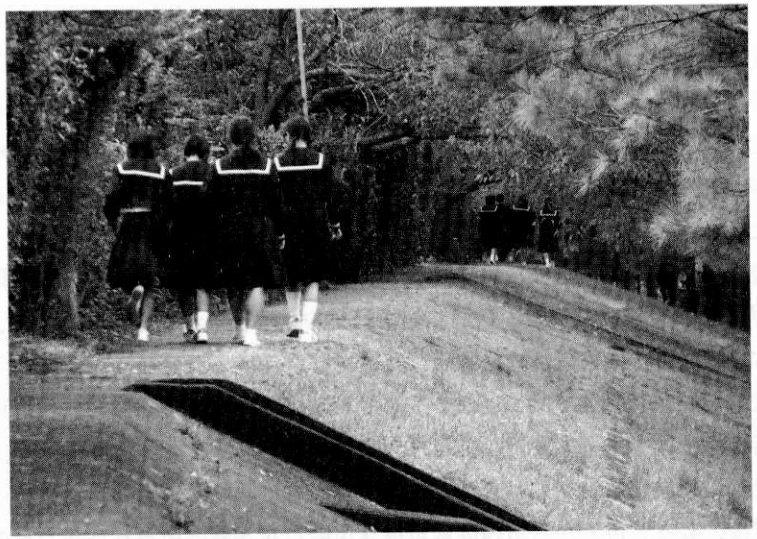

写真 14-3　中学生には通学路でもある広村堤防（津浪祭の後で 2005.11.3 筆者撮影）

て土を盛った先祖への謝恩の気持ちを込めて、1903 年から続いている。海岸に地元代表の児童・生徒や町の要人が参列するもので、多少儀式的であり参加者も多くない。

これに対し、2003 年から 10 月中旬に「稲むらの火祭り」という祭りが加わった。町役場から広八幡神社までおよそ 2km の道を、多くの市民が参加して松明行列が練り歩く。広八幡神社では巫女の舞が奉納され、参加者には「稲むらうどん」が振る舞われる。この祭りの仕掛け人が先述の清水氏である。人々の心の中に防災意識や梧陵への畏敬の念を継承するこの仕組みは、ソフトな適応策と言えよう（写真 14-3）。

8　広村堤防再考

広村堤防は、漁師に課せられた加子米の田に建設された。将来の漁師の負担を軽減する目的とされているが、さらに言えば、堤防建設への協力を漁師から得るためでもあったのだろう。堤防は、海と村とを分け隔ててしまう。堤防が造られて一番不便になるのは漁師であろう。村全体を守る適応策を実

現するためには、漁師の理解が必要だったのである。

ところで、梧陵は単に堤防を築いたのであろうか。自分の住み処が失われた中、後世の人のための堤防造りに手を貸す人もいまい。何か工夫しなければ、人は動かない。

広川町で配布している『濱口梧陵小傳』というものがある。実にリアルに書かれたもので、梧陵らの被災状況を知る上では欠かせない。そこには、このような一節がある。

> 困っている村民は、ほとんどが家財を流失しており、数日経ってからそれらを拾い集めても、その十分の一も取り戻すことが出来なかった。いつもはわずかながらも蓄えがある者でさえも、日々の生業を失い、朝夕、飯を炊く竈の煙を立てることもできない悲しい境遇に陥った。そこで、毎日このような困っている連中を使用して、散乱している俵物を拾い集めさせたり、道路を開通させたり、あるいは番人にしたりして、わずかながらも生計の立つようにした。

堤防建設にあたった村人に日当を支払うようになったアイデアは、ここから来ているようだ。さらに、「拾い集めた梁（はり）・柱・竹・木・瓦の類は、各所に積み上げ、番号を付けて、後日、入札によって売却した。それで得た金を、村民の家屋の建坪面積で割りふり分配した」という。

津波ですべてが奪われた村民が、競売に参加できるわけがない。現金がなければならない。そのために、堤防建設が位置付くのである。日当で支払われた意味はそこにある。堤防建設は、被災民に購買力を多少なりとも付ける目的もあった。利益の再配分は、競売へのさらなる参加を呼び起こしたであろう。結果、廃材を村民一体となって、資源として大切に使うことにもなったと考えられる（このエピソードは 7 章で提唱されている「排出資源」に通じる）。梧陵は、その状況にあった経済を動かした（図 14-1）。

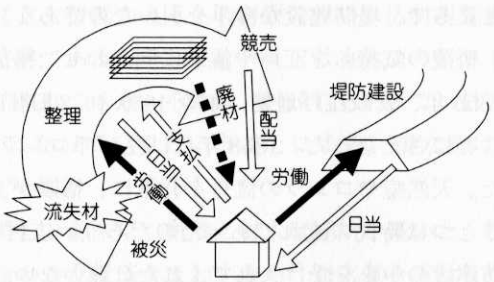

図 14-1　梧陵が動かした小さな経済

9　広村堤防再々考

濱口大明神の建立という案が、堤防建設中にあがった。梧陵の貢献を称えようという声である。これに対し、「その様なことをするならこれからは世話はできない」と梧陵は叱りつけたという。これは、梧陵の「謙虚で高潔な人柄」と解釈されているが、別の見方も可能なように思う。もしかすると、この時、堤防建設を打ち切ろうと梧陵は考えていたのではないだろうか。

そういえば、なぜ、計画の3分の2で堤防建設を「一旦中止」(杉村, 1934)したのであろう。堤防建設は、梧陵が生涯をかけて行った事業ではなく、30歳代に行った事業である。資金が尽きたのであろうか。堤防建設を終えた翌1859年、江戸の種痘所再建に300両を梧陵は寄付し、その後も400両寄付している。資金が尽きた様子はない。

梧陵が想定した小さな経済の循環は、廃材があることと、堤防が建築途中にあることが前提である。何年も経てば廃材がなくなる。堤防の完成が近くなれば村民の志気も衰え、中には日当を当てにする者が出てきてもおかしくない。梧陵のモデルが通用しなくなってきたのであろう。「百世の安堵を図る」目的で着工した堤防であるから、その目的が達成されればよい。また、神社の創建が立案されたということは、村人の生活も元に戻り、多少の余裕さえ出てきたということではないか。その経済的基盤を提供したのは、梧陵の会社である。もし梧陵一人が祀られたとしたら、従業員からの反発さえ招きかねない。だから梧陵は、頑なに神社建立を断り、3分の2の完成を見たところで、堤防建設から手を引いたのである。

梧陵の気持ちを江戸や銚子に向かわせた事態も起きていた。堤防建設中の1855年、安政江戸地震(M6.9, 1855. 10. 2旧暦)が発生し、江戸の店をたたむことにさえなった。1858年には江戸でコレラが大流行し、36万人が死亡した。天然痘やコレラの流行を背景に、梧陵が支援の矛先を医療に向けたのも、ひとつは時代の流れであったのだろう。広村の村民も、「それならば」と堤防建設の中止を受け入れてくれたに違いない。

また、梧陵は父親の顔を知らない。生後7ヶ月後に実父は逝去。母は再婚

し、異父の弟妹が合わせて3人産まれる。しかし、その3人とも若くして亡くなった(表14-1)。西洋医学への梧陵の支援は、亡き父や弟妹への弔いの意味もあったのではなかろうか。12歳で本家の養子となった梧陵は、人の命とそのはかなさ、大切さを、幼い頃から、そして少し離れたところから見つめていたのであろう。稲むらの火の先で、生死をさまよって漂流していた村民に、梧陵は誰を重ねて見つめ、何と呼びかけていたのであろうか。いずれにしても、人間愛にあふれた梧陵の姿が浮かび上がってくる。

表14-1　梧陵年譜(一部)

年	数え年	事項
1820	1	梧陵誕生
1821	2	父七衛門逝去(実母しんその後再婚)
1826	7	異父妹つぎ誕生
1828	9	異父弟松三郎誕生
1829	10	異父弟松三郎没
1830	11	異父弟亀之助誕生
1831	12	本家へ養子に出る
1832	13	異父弟亀之助没
1839	20	池永まつと結婚
1840	21	異父妹つぎ没
1854	35	安政南海地震(稲むらに火)

10　おわりに

堤防建設を成り立たせたと思われる条件は他にもある。当時の広村が300から400戸、1200人程度と小規模であり、名士梧陵の声が届きやすかったこと。梧陵の経営者としての才覚、後世の人々への村民の思い。広村堤防は、多くの偶然が重なって出来た奇跡である。そして、ハードはもとよりソフトとしても、親しみを込めて継承されてきた。それは、村民自らの手で、村内のお金で造られ、人々の誇りになっているということによる。清水氏は、日々、ここを聖地として語っている。

昔「天洲の浜」と呼ばれた美しい海岸に、梧陵と村人は堤防を築いた。梧陵は、津波災害という状況に合わせた経済をまわすという適応策を実行した。これひとつとっても教訓になる。しかし同時に、その前提が崩れると立ちゆ

かなくなることも示している。無限な地球資源を前提にした人間の有り様が破綻することを、梧陵の堤防は示唆しているのかもしれない。

コラム 10

持続可能な開発のための教育[ESD]

ESDとはEducation for Sustainable Developmentの略語である。日本語では「持続可能な開発のための教育」という訳語が一般的になっている。2005年からの10年間を「国連持続可能な開発のための教育の10年」とすることが決議され、この聞き慣れない言葉が広まることになった。日本政府も国内での実施計画を作り、取り組んでいる。このほか、EfS（Education for Sustainability）という言葉もある。

本書も持続可能な社会をつくっていこうとするものである。その意味でESDである。大学など高等教育機関で行われるESDは、特にHESD（Higher Education for Sustainable Development）とよばれる。みなさんが各分野の専門家に育っていく過程で、持続可能な社会づくりに参画できる力を身につけていくことが期待されている。何のためにこんな勉強をしているのかわからない、と嘆きたくなるときには、今勉強しているのは、持続可能な社会をつくるためらしいと考えてみるのもいいだろう。

ESDと環境教育の関係は、必ずしも明確ではない。日本政府の実施計画（概要）では、「持続可能な開発のための教育の課題」として、世代間公平、地域間公平、男女間公平、社会的寛容、貧困削減、環境保全、天然資源保全、公正・平和な社会をあげている。これを見れば環境教育はESDのほんの一部に見える。「持続可能な開発」概念において、先進国は環境保全を期待し、途上国は「開発」が続けられることを期待したという。環境保全のためには環境教育が求められる。開発を進め、国を豊かにするためには、基礎教育の普及が必要である。この構図は環境教育が国際的にスタートした1970年代から共通している。環境教育には当初からこうした広い思いがこめられていたともいわれ、ESDはその思いを改めて明確にしたものだともいえる。

サステイナビリティ学の成果を広め、参加する人を育てる教育がサステイナビリティ学教育である。サステイナビリティ学はその名前からして「持続可能」の方に重点を置いている。しかし、その定義の中には「持続可能性という観点から各システムを再構築し」とある（各システムとは地球、社会、人間の3システム）。これにより現在のシステムを持続させようとするにとどまらないものであることがわかる。

サステイナビリティ学教育の裾野が広がることを筆者は期待している。誰にとっても大切ではあるが、課題の優先順位は地域によって異なる。サステイナビリティ学に参加する人がサステイナビリティの視点で各学問を見直すとすれば、サステイナビリティ学教育に携わる人はサステイナビリティの視点でこれまでの教育を見直すことになる。それはきっとESDの第一歩でもあるだろう。

（郡司晴元）